

北方領土と工樂松右衛門

9月27日の産経新聞によると、安倍首相は、北海道根室市から対岸の北方領土を視察することを検討する、との考えを持っていることが分かった。鶴保沖縄、北方担当大臣が9月18日に根室市の納沙布岬を訪れて対岸の歯舞群島などを視察した際、その前日の17日に行った元島民との懇談の中で首相の視察について要請があったことを安倍首相に伝えたそうだ。歴代総理は、鈴木善幸、森善朗、小泉純一郎など、いずれもヘリコプターや巡視艇などで遠くから見ただけで、真剣に我が国の多くの開拓者が訪れ、交易を行っていた領土を取り戻そうという気概があるのか、無念でならない。択捉島は、わが祖先が開発したという歴史的事実をもとに、今こそわが故郷から強く、北方領土返還の思いを全国に発したいものである。

工樂松右衛門がこの蝦夷地に渡って千石船などの大型船が停泊できる港を建設したのは、近藤重蔵らの択捉視察、伊能忠敬の陸奥、出羽等の沿岸測量が行われるはるか以前の10年前、1789年のことである。その択捉島が、ご存知のように第二次大戦の終戦後（ポツダム宣言受諾後）に、突然ソ連（現ロシア）に侵攻され、奪われてしまったままである。これ以降、国民の強い願いである北方領土返還運動につながるが、いまだに強い信念を持った政治家が現れず、戦略なき外交が続いている。

江戸幕府が蝦夷地の対策を考え出したのは、ロシアの南下政策開始より随分遅れたといわれるが、蝦夷地の探検を最初におこなったのは三代将軍のころと言われる。しかしそれは失敗に終わる。その後、吉宗の時代の「享保の改革」により、封建社会の閉塞感を打破するために蝦夷地の開拓が注目されるようになった。天明2年（1782年）仙台藩の医師工藤兵助が著わした「赤蝦夷風説考」でロシアの南下を警告したため、幕府の田沼意次の目に留まり、田沼意次をして蝦夷地の開発に目を向けさせ、調査を開始することになった。その後田沼意次は幕府内で失脚するが、その後も蝦夷地の開発は単に経済的側面からだけでなく、ロシアに対する海防上の大きな問題となっていた。そこで寛政2年（1789年）、幕府から択捉島に埠頭建設をするようにとの命が工樂松右衛門に下った。彼が作った埠頭は、今も有萌湾の河口にその痕跡を残している。現地人は、その埠頭を松右衛門澗と呼んでいたそうだ。

時の江戸幕府からの命令でロシアの南下政策に対抗するため、国防と蝦夷地との交易を発展させるため、択捉島にわたって、5年の歳月をかけて大型の船がつける埠頭を建設し、蝦夷地との交易を盛んにして北方のニシンや鮭を、早船に仕立てて上方などに運び、庶民の食卓を豊かにしたことである。

享和2年（1802年）2月、幕府はこの択捉の埠頭築造の功を賞して「工樂」の姓を与えた。松右衛門が創意工夫した「帆」の開発のためではない。

工樂松右衛門というと、江戸時代の全国の物資の運搬、移動に大きな貢献をして産業の発展、豊かな庶民生活の向上に尽くした北前船などに使用された「帆」の改良で名が知られているが、松右衛門の今日における時代性は、それよりももっと現代的な意義のある土木技術に貢献している所にある。それは河川の浚渫工事、港湾の浚渫や建設工事などに使われる土木工事機械の原型ともいわれる工事用の船の開発である。それらを使用して、はるか北方の択捉島において港を建設したことである。